

人は、戦後自ら我國人に對する、感情を害し在れば、彼等に對しては成るべく懇篤を旨とし敢て彼等の感情に逆ふこと有るべからずと、心竊に警戒する所ありしに、豈に料らんや、事實は大に之に反し、彼等の歓迎饗應至らざる無く、予は此地に於て、日用品買辦の爲め露國商の店頭立つや、店主出で來りて別室に誘ひ、茶を饗し菓を供へ、自國の短所を擧げて我國の武勇を賞し、優遇歡待、苟も措かず。斯の如きこと一再ならずして、又彼等が衷心よりするものなること明なりとす。是れ所謂大國民の襟度か或は何等の反動なるかを知らずと雖も、兎に角旅行中の快事と謂はざるべからず。

尙ほ戦前に於ては、當地及伊犁一帶、露國人の勢力旺盛なりしこと、殆んど言語に絶し、若し一朝兩國人間に、紛争の生ずるもの有らんか、事の正否に拘はらず、常に露人の勝利に歸し、清國官憲は只管露國官憲の鼻息をのみ窺ひて、始終彼の爲めに壓伏せられ、土人は唯々怨を呑んで、何事も彼等に服従し來りしが、日露戦役後の形勢は、俄然一變して、露人は諸事慎重の態度を取り、清人は稍々輕侮の念を生じ、爲めに對等の交際を爲すに至れり。故に土人の我帝國を徳とし、我叡聖文武なる